

C-97 スイスと日本の親、子の衣生活感の相違

東北女大家政 ○奥野右子 帝塚山学院短大 田中道一

目的 洋服すなわち、西洋式衣服が我国の実生活にとり入れられてから百年余りの今日、衣服、服装に対する考え方は、その発祥の地である西洋と、果して同じであるか否かを知る。今回は対象を子供服に限定し、親、子の互れに対する関心及び管理の内容について比較、検討する。

方法 調査は西ヨーロッパを代表する都市の一つである、スイス、チューリッヒ市と、気候のあまり異ならない青森県弘前市に於て、3～6才の園児を対象に 1.所持内容 2.管理方法 3.嗜好等について、アンケート調査及び、一部聞きとり調査を行った。解答は母親に依頼した。

	チューリッヒ	弘前
男	30名	68名
女	30	85
計	60	153
調査期間	1977年10～11月	1978年4～5月

結果 1. Under Wear について、ズロース、ブリーフの所持枚数は、弘前では、一人平均男 6.0 枚、女 6.2 枚であるが、チューリッヒでは、男 9.3 枚、女 14.4 枚である。 2. 手作り、手編み服は、チューリッヒの母親の 45% がある程度以上計画的に行っているが、弘前では 27% にすぎない。 3. 母親の子供の服装に対する好みは、チューリッヒでは、丈夫で長もちし、洗濯等の管理がしやすい、実用的な服であり、ついで可愛らしい服、スカーティな服となっているが、弘前では、特に管理性を強く望む声が多かった。子供の意向は、弘前ではテレビマンなどの影響があるが、チューリッヒには、これらはみられない。

